

兄は戦死しており、私は農林省統計情報事務所に勤務しながら、猫の額ほどの農地を耕す典型的な第二種兼業農家として四十年を過ごしたが、昭和六十一年定年退職し、妻と静かな毎日を送っている。

スパイ容疑と国籍剝奪に

さいなまれて！

東京都 福久 かずえ

一 運命の八月十五日

私は、大正十五（一九二六）年の八月十九日に大連で生まれて以来、満州で育った。昭和二十（一九四五）年八月十五日の終戦時には、旅順リョウシュンにあった師範学校女子部に在学中であった。電気技師であった父をはじめ一家は、河北省の承德ショウタイという所で暮らしていたので、終戦の日を境として生き別れになってしまった。同じ旅順師範学校の男子部に在学していた弟は、七月の初めに学徒出陣したので、身寄りはいなく

独りぼっちになってしまった。

運命の日の八月十五日、私たちは校舎の裏庭で防空壕を掘っていたが、そこに突然、日本の無条件降伏の玉音放送が流れた。何と、「戦争は終わったのだ！日本は負けたのだ！」ということだった。最初は漠然としていて、その意味が良く分からなかったが、だんだんと時間が経つに従ってそのことの重大さに気が付き、大きな衝動を受けて出る言葉がなかった。

戦局の実情もあまり知らされずに、日本軍の実力の認識にも欠けていて、無知に近い状態だった私たち女子部の生徒にとって、どうしても信じられないことだった。二、三日はまだ、夢の中の出来事のような気がしていた。

しかし、八月末ごろになると、旅順にもソ連兵が多数進駐してきて、学校にもなだれ込んできた。私たちの目の前で、銃剣を突き付けて乱暴な行為を繰り返したが、それを見たときに、敗戦という事実を身をもって確認した。信じられなかったことが一挙に氷解してしまった。何をする暇もなく、どうするかと考え

る余力もなく、どうして自分の身を守るかを判断する間もなかった。いつ我が身に危険が迫るかも知れないと思うと、生きた心地はしなかった。校舎も寮も、彼らのなすがままで、徹底的に荒れ尽くされてしまった。

恐怖と不安にさいなまれていた最中に、「小学校に避難せよ」という指示によって、取るものも取りあえずに、寮の裏口から外の様子を窺いながら、避難先の小学校に向かつてひた走りに走った。それから先のことは全然記憶に残っていない。極度の緊張感から記憶喪失になってしまったのだろうが、こんなに惨めで恐ろしい目に遭ったのは生まれて初めてのことだった。

その日からは、何が何でもソ連兵による辱めから、身を守るために必死の思いで過ごすことになった。顔には、すずを塗って薄黒くし、頭髮は短く切って男髪にした。服装も男物を探して男装をしたが、なかなか思うような格好にはならなかった。そして、安全と思われる場所を転々としていた。

そんな日々を過ごしているうちに、九月十八日にな

り、旅順在留の日本人に対して大連^{ダライ}に避難するようにとの避難命令が出された。ついに旅順を脱出することとなった。

大連に着いて、それまで行動を共にしていたHさんと大連駅で別れた。私は、大連市内で洋装店を経営していた知人を頼って、そこに身を寄せた。しかし、大連でもソ連兵が傍若無人に横行していて、治安は極度に悪化していた。ソ連兵は、「マダム　ダワイ、マダム　ダワイ」と叫びながら街中を騒ぎ回り、連日連夜の如くに一般住宅を襲ってきて、家探しをしていた。ソ連兵が襲ってくる度に、私たち女性は隣近所の中国人の家に逃げ込み、隠してもらった。その中国人たちも、私たちを親切に招き入れ快くかばってくれた。

ソ連兵は、私たちの姿が見えないので、その周辺の中国人の家にまで押し掛けてきて探し回っていた。私の隠れている家の主人は、玄関で酒やタバコを差し出して、「マダム　ニエツト、マダム　ニエツト」と言って追い払ってくれた。私たちは、どんなに感謝したか知れないが、惨めさも嫌というほど味わったもの

だった。

二 大連生活の一年

九月下旬のある日、撫順^{アズツヨク}で終戦を迎えた学徒兵の弟が、大変な苦勞を重ねながら小さな米袋を一つ背負って、命からがら無蓋車に一週間も乗せられて大連に着した。弟とは旅順師範学校で別れて以来、三カ月ぶりの再会であった。お互いに無事であったことを、手を取り合って喜んだ。

弟の話によると、千人以上の人が撫順から奉天^{ホムチン}（瀋陽）まで歩かされたとのことだった。何百、何千キロメートルもあることだろうが、その遠いところを線路伝いに歩くのは、まだまだましな方で、多くの人は道なき道を、しかも雨風にうたれながら歩いていったそう
で、飢えと疲労で、ばたばたと倒れる人が出て、途中で亡くなった人もたくさんいたとのことだ。動けなくなった人を助けることもできずに、自分の体でさえま
まならないので、他人を助けることは気持ちの上ではあっても、気力、体力の方がそれに伴わずに、涙をの
んで見捨てたとのことだった。さらに弟は、「こうし

て無事に大連まで帰ってこられたのは、奇跡としか言いようがない」とも話していた。

世話になっている知人の一家は、売り食いで生活をしてきたが、着の身着のまま避難してきて、この家に身を寄せた私や、命懸けでここまできた弟には、売る物など何一つなかった。働いてお金を得ることしか方法はなかった。弟は、大連ドックで石炭運びや、まき拾いをした。私は、友人の紹介で敗戦までは幾久屋といっていたデパートで、写真機や写真材料などの委託ケースを出している中国人の店で店番として働き、わずかばかりの賃金でやつのこと毎日の糊口をしのごうとができた。しかし、それもしばらくの間で、私は無理がたたったのか、昔やったことのある結核性肋膜炎を再発してしまい、早期治療が必要との医師の診断で、店を休み途方に暮れてしまった。苦境を知った私の店の主人が、「そんなに困っているのなら、力になってあげよう」と言って、治療に必要なお金を出してくれた。

当時はまだ、大連病院という大病院でも結核の特効

薬であるストレプトマイシンは手に入らなかった。

戦後、いろいろな病気に効果を発揮していたペニシリンはあったが、高価で一般にはなかなか手の出せない薬であったが、そのペニシリンを買うことができた。一週間、続けて注射をしているうちに、熱が下がり痛みも和らいできた。まさに危機一髪という危険な状態で一命を取り留めることができた。私は、店の主人の温かい人間性に感動し、それからは命の恩人として接していた。後に、彼は私の一生の好伴侶となったのである。

昭和二十一年の春になると、大連港からの引揚げが開始された。その準備のために在留日本人は、集団行動をするようになって引揚げを待っていた。しかし私は、自分の健康状態がまだ完全に回復していないので、このままの状態では日本に帰国しても、果たして完全な治療ができるかどうかと考えて、自分の意志で大連に残留することを決心した。やむを得ずに弟は、先に引き揚げて日本に帰ることとなった。

とにかく、承德にいたのであろう父や母が、無事に

帰国できることを願って、引揚げ船のタラップを登っていく弟の後姿に手を合わせて、無事に帰り着くことを祈った。涙がとめどもなく流れてきた。あの涙で別れた悲しみは、終生忘れることのできない思い出である。

三 十年後の家族再会

昭和二十二年に、命の恩人である店主の人間性にひかれて結婚することとなった。しかし、結婚当初は一定の収入がなかったので生活が苦しかった。幸いに大連の日僑労働組合診療所で、見習い看護婦として働くことができるようになった。中国人の患者の看護をしながら、中国語の勉強を一生懸命にした。将来は中国で医者資格を取ろうと決心して働いていた。その間に子供も生まれ、看護婦としての技術や知識も身につけ、平穩に過ごしていた。

そんなとき、日本に帰国した友人からの便りで、旅順と承德で別れ別れになって生死も分からなくなっていた私の家族が、全員無事で日本に引き揚げていて、本籍地の広島で元気に暮らしていることを知った。私

は、急に何が何でも会いたくなり、一度、一時帰国を
したいと思うようになった。

昭和三十二年に、長男を連れて一時帰国をすること
になり、天津の塘沽港から船で舞鶴港に向かった。い
まだ見知らぬ祖国、どんなところだろうと不安な気持
ちでいっぱいだった。舞鶴港に着いて初めて祖国日本
の土を踏んだ私にとっては、日本はやはり異国であっ
た。

見るもの、聞くものみんな珍しかった。異文化に接
して、まさにカルチャーショックだった。それは当
初、ある程度は覚悟していたことだったが、それ以上
でショックはあまりにも大きかった。舞鶴では十数年
間も別れ別れになっていた両親の出迎えを受けて、涙
と感激とで言葉が出なかった。感慨無量なものがあっ
た。帰郷列車に乗って一路、広島に向かった。

大連で涙の別れをしていた弟は、中学校の教師をし
ていて一家を支えていた。嬉しいやら悲しいやら、筆
舌に尽くし難い複雑な心境で数日を過ごした。

私は、終戦のわずか数日前にこの広島に特殊爆弾が

落とされて、市内とその周辺一帯が一瞬のうちに焼け
野原と化して、十五万人といわれる尊い人命が奪われ
て、身内でも父方の本家二十人が焼死したという悲惨
事を広島に里帰りをして初めて知った。これが、あの
原子爆弾であることを改めて知り、胸のつまる思い
だった。話を聞いていて、私の持っている爆弾の知識
とは雲泥の差以上のものを感じた。

広島に滞在中、市役所に私の古い戸籍が残っている
ことを確認して感激した。県庁で海外渡航用のパス
ポートも発行してもらうことができた。

日本の旅券だから当然に、私の日本国籍はあるもの
と疑わずに、信じていた。

四 中国国籍の取得

その年の秋には、一時帰国から大連に戻って再び大
連児童医院で、看護婦としての勤務を開始した。

一時帰国以来、私はこれからの自分の生き方につい
ていろいろと悩み、そして考えた。いつまでも日本の
国籍のままで、この中国で家庭を持ち、子供を育て、
そして看護婦として働き、将来は医師になろうとして

いることが、果たしてよいのかどうかと考え悩んでいた。日本人だからという差別に耐えかね、中国人の夫と日本人の血を引く子供の将来を考えると、このままではいけないと考えるようになった。そしてその結果、やむを得ずに中国国籍を取得することとした。名前も同時に、林育華と中国名に改めて、完全に中国人となった。

中国人となれば、一応職場での政治学習にも参加することができるようになり、また、社会活動にも加わることが許されるし、外国人未解放地区への旅行の自由も許可されるようになった。

昭和三十四年には、児童病院の院長の推薦で、大連医学院で臨床医学についての勉強をすることになり、やっと念願の一人前の医師としての資格を取り、それから約二十年間にわたって、大連児童病院で小児科医師として勤めることができた。

五 巡回医療隊での活動

昭和四十年の春には、党の政策である「知識分子の思想改造」の呼び掛けに応じて、農村巡回医療隊の一

員として参加し、遼寧省の金県と復県の辺鄙な山村に派遣され、約半年にわたって現地農民の医療に従事した。

人民公社の幹部や農村生産隊の隊長は、私が中国籍の日本人であることを承知していたが、現地の農民たちには、私の経歴は隠して公開されていなかった。医療巡回中に、凶らずも過去の抗日戦争において、日本軍の襲撃を受けて負傷した農村幹部や、それによって犠牲になった農民の家族にも出会ったが、彼らは一樣に、精神的、経済的、そして身体的に大きな被害を被っていて、今日でもその悲惨な境遇にさらされている。その人々の訴えに対しては、日本人の血を引いている私には返す言葉もなく、あの忌まわしい戦争への激しい憤りに、全身を揺さぶられるだけであった。

都会で生活していた私の想像とはまるっきり違った農村で、貧困と病苦とに立ち向かって闘っている農民に対して、私は昼夜を分けず献身的に治療に専念して、そのような境遇にある農民と寝食を共にして、いろいろな問題に遭遇しながら、本当の医療技

術についての経験を積んでいた。接する農民たちからは、「自分たちにとっては、本当に理解のある大切な医師である」と、信頼されるように努力をしていた。

そのときから私は、自分の終生の仕事として、また、中日友好のために医師という仕事を続けていきたいという決心を固めた。そう決心すると、私の今までの人生観にも変化が生じてきた。

六 青天の霹靂

身魂を投げうって活動をしていた、農村巡回医療隊の任務も一応終わって大連に戻ったときは、既に季節は夏が過ぎて秋も深まっていた。あの中国全土に吹き荒れた、忌まわしき文化大革命運動の嵐の真ただ中に入り込んでしまったのである。中国人としての国籍を得れば、一連の政治運動に参加しなければならなかった。このことは、否応なしに決められていることであった。

私には、それを避けて通れる道はなかったのである。戦争が終わり新生中国の揺らんの激動する時代を、中国の人たちと共に学び、共に働いて今日まで

やってきたのだが、私の勤務する大連兒童医院にも、その文革の嵐は避けることなく、どっと押し寄せてきた。

病院内の至るところに、党内外の批判や意見などが発言されていたし、それを建議する『大字報』という壁新聞が、また至るところに張り出されていた。病院の本来の仕事である医療体制も、いつしか乱れてきて病院としての役目をなさなくなり、不気味な雰囲気醸し出してきて、人々の毎日は戦々恐々としていた。

そんな状態が続いていた翌年の夏、文革の嵐は一向に収まらず、それどころか燎原の火の如くにエスカレートしていた。病院でも、「打倒、牛鬼蛇神（すべての妖怪変化どもを一掃せよ）」のスローガンの下に、疑わしげな知識分子を次々に捕まえては家宅捜査をしていた。病棟の一角に、「牛棚（牛小屋と称した偽りの小屋）」を作り、そこに捕まえた者を閉じ込めていた。そのころはまだ、私に対して矛先は向けられていなかった。私を摘発するような大字報は一枚もなく、罪人という感覚も、何らの抑圧も感じていなかった。

だが、九月に入ったある朝、いつものとおり出勤すると、二人の同僚が私を取り囲み、「今日は仕事をしなくてもよいから、人事科までちょっと来てくれ！」といったもの話しぶりや違つて、威圧的な口調をして言ってきた。そして、私の言葉も聞かずに、薄暗い部屋に私を連れ込んで、いきなり「日本軍国主義分子」と言つて私をののしつた。私に対して、「日本の特務（スパイ）」だという嫌疑を掛けたのだった。その場ですぐに隔離された。ついに私は、私の人權と自由を剝奪されるというはめに陥つてしまった。突然のことでもあり、いくら考えても自分の身に、やましいこともないので頭の中は真つ白になり、目の前は何もかも真つ暗になってしまった。

政治迫害であることは知りながら、でも何故に私に対してこんな侮辱を与えるのかと、考えれば考えるほど、情けなく、悔しかった。反論する機会も与えられず、法律に訴えるということも許されなかった。このことは、まさに青天の霹靂であった。我が身に降りかかってきた災禍は、どこから降つてきたのか分から

なかったが、少し気持ちが悪く落ちていくからよくよく考えてみたら、それは私が日本人であるが故であった。

あの過去の戦争の歴史を背負つて今日まで生きてきた私は、「災禍從天降臨（禍は天から降りかかる）」という昔から中国に伝わる諺の意味が、痛いほど身にしみて分かつてきた。

七 心の痛手

七カ月の間、私は小さな薄暗い牛棚の一隅に閉じ込められていた。時間は、ただいたららずに過ぎていった。冷たいコンクリートの床の上に、薄いわら布団を一枚敷き、その上に一枚の毛布にくるまって、ひと冬を過ごしていた。昼は重労働を強いられ、夜は尋問というより拷問の毎日だった。

「お前の父親は元日本軍の軍人で、中国人を殺した。その罪悪を白状せよ」と言つて、ムチを床にたたきつけながら脅し続けたが、私はどのような脅しを受けても、びくともせず「正義は常に我にあり」と心に決めて平然として座り込み、一言も反論することをしなかった。

牛棚では毎朝、起きるとまず最初に、薄暗い電灯の下で、「毛主席語録」を唱えさせられ、次いで毛主席の肖像の前にぬかずいて、党への忠誠を誓わされた。

そして、朝と晩の二回、民衆の前に引きずり出された。広場では同時に、銅鑼が打ち鳴らされて民衆をあおった。引きずり出された者は、紅衛兵や、民衆の言うなりになって引き回され、棒で打たれ、背中を足で蹴られて、体中を小突かれた。

批判闘争の場では、「日本の鬼子」といって罵倒された。しかし、その「鬼」とは、過去に中国の民衆を苦しめ、泣かせた日本の姿であったことに思いをいたし、このことに対しては、私は少しも反抗をしなかった。

牛棚生活の初めのころは、家族との面会は原則として許されなかったが、夫は時々、着替えなどを持って会いに来てくれた。限られている時間の中で、夫は、私がこの牛棚生活に耐えられないのではないかと心配してくれて、「夜は寒くないか」とか、「ご飯はちゃんと食べているか」などのことを、言葉は少ないが、根

底からいたわってくれた。そして夫は、「最後まで党の政策を信じて、自分にうそをついたり、自分をだますようなことはしないように」と、言っていた。さらに、「子供は、私がついているから安心しなさい」とも言って励ましてくれた。

あの無法な文化大革命の過程において、私は人権と自由を失ったが、そのことよりも、敗戦後に中国人である夫と結婚したという私の置かれている現状と、私の心の中の悲しみを十分に知っている夫からの無限の愛と、信頼を改めて確認したことの方が、何物にも代えられない宝であった。これから先の私の人生において、どのような艱難辛苦が起きようとも、掛け替えない夫や子供のために、一生懸命に頑張って生きて行かなければと、そんな力を与えてくれたように思い、牛棚の隅で一人涙したものだ。

やがて、十月も過ぎて秋も深まってきた中秋節の夜空に輝く満月を眺めながら、その日の昼間、長女が月餅と果物の差し入れを持って面会に来てくれたときに、ふと言っていた言葉と、涙を流しながら帰って

いった後ろ姿を思い出した。「みんなが、お母さんのことを良い人だと言っているから、早く帰って来てね」と言っていた、いじらしい姿が涙とともに浮かんで来た。その場で強く抱きしめたかったが、それもなげに後ろ姿を見送るだけだった。涙が止めどもなく流れてきた。

長くて、辛かった牛棚生活において、肉体的にムチを受けた瞬間の緊張感と、恐怖心の中で過ごしていた夜のことを思うときには、いたたまれない悲しさが込み上げてくるが、それ以上に血のにじむような精神的な深い心の傷は、おそらく一生かかっても癒すことのできないものである。

七カ月の間、二度と体験したくない様々な出来事を心の中に刻み込んで、昭和四十三年三月末、やっと汚名はそそがれて、牛棚から解放され帰宅することを許されたが、前職の病院勤務に復帰することはできなかった。

三カ月間は、病院内の便所や、病棟の清掃作業をさせられた。しかし、文化大革命のもたらした後遺症は

私だけにとどまらずに、我が最愛の長男と、次女にまでその累が及んだ。

長男と次女は、下放青年として五年間の農村での強制労働に送られ、大学受験の資格さえ逸してしまった。就職や結婚問題にまでその影響が及んでしまった。家族の受けた精神的な打撃は、想像以上のものがあった。

八 教師になる願いかなって

昭和五十四年の秋、待望久しかった日中平和条約が締結された。この明るいニュースは、中国に残留している邦人にとっては、これ以上に勝る喜びはなかった。

その年に、残留邦人の婦人に対して、大連外国語学院をはじめとして、複数の大学から日本語教師としての募集があった。文革四人組追放後の開放政策の影響と、大学教育の正常化によって、日本語教師が不足していた。それを補うために、一定の学歴と能力を持っている者から選考して採用された。

私が医者を辞めた本当の理由は、「文革後にさらに

差別を受けながら苦悩の人生を歩むよりも、生きていくという感動をもたらし、そして失われた青春と若々しい心を取り戻すところが、まだほかに必ずあるはずだと思い、探し求めるため」であった。

終戦前は、師範学校を卒業したならば小学校の教師として勤めることが理想であったが、敗戦によりその望みは夢となり、方向転換を余儀なくされてしまった。その結果、看護婦を経て医者となったのだが、異文化への適応には随分と苦しんだ。その苦しみの中において、自分の力で自己の進むべき道を切り開いていく自信と、そして何ものにも負けずに生き抜くことの素晴らしさを得たいと願っていた。

太平洋戦争が終結して四十数年を経過した当時においては、仕事と家庭を両立させていくことは並大抵のことではなかったが、私の最大の理解者であり、よき協力者で包容力のある夫を中心に、喜びも悲しみも分かち合って過ごしている家族が常に私を支えてくれた。私たちが結婚するときに、民族が違い現実の環境が異なっている二人が誓い合った、「互敬互愛」の言

葉のとおり、夫婦二人三脚で新しい中国においての社会事業に、いささかなりとも貢献できれば幸いと考えるようになった。

日本人でありながら中国で生まれ、少女時代までは日本人として育ち、成人してからは中国人として生きてきた私の夢は、これからも大連で暮らし、日本語学院の教師を退職したら、夫婦で青春の思い出の地を旅しながら往時を回顧し、そしてその後は、子や孫たちの成長を楽しみに、安逸な生活を送りたいと考えていた。そして、やがては生まれ故郷の大連の土になることを、最大の喜びとして願っていた。

昭和六十二年九月、六十二歳になって日本語学院を定年退職した。しかし、まだ元気で健康にも自信があったので働くことを決意し、夫と同伴で広西省の壮族自治区にある桂林技術交流センターの、大連外国語学院の分校に教師として赴任した。ここでは、現地の観光ガイドの口語の指導にあたった。初めて、自分の力と自分の足で選んだ教師の道であった。中国には古来から、「教師は太陽底下最高の職業（教師はこの世

で最高の仕事」という諺があるが、現役時代と同様に熱い情熱が沸きだしてきて、人に教えることの喜びと、楽しさを楽しみじみと味わっていた。

九 心の葛藤

平成元年の春、桂林技術交流センターでの口語指導の任期中間として、一年半ぶりに懐しの大連に戻ったが、戻るや否や長男の嫁の日本留学の話が待っていた。文革時代には、大学、専門学校に進学することも許されなかった子供や孫たちが、次から次と「日本に留学したい」「将来は母の祖国日本で暮らしたい」などと言いつつ出して私を慌てさせた。その申し出は真剣であったので、私はびっくりした。同時に、夫と子供たちとの間で心の葛藤が生じていた。冷静に考えてみると、文革により精神的、肉体的に迫害を受けたのは、私だけではなかったのだった。その程度には差があるかも知れないが、夫も子供たちも、大なり小なりに迫害を受けていたのだった。

過去のあの忌まわしい出来事に触れる度に、日本に帰って日本で永住することを望んでいたのは、私だけ

でなく、いつしか家族の共通した願いとなっていたのだった。

私は、何とかしてみんなの希望と夢とをかなえてやりたいものと考えているようになっていて、そして一つの大きな決心をした。

それは、まず私の中国人としての籍を除き、日本のパスポートで日本に帰国することだった。その実行を決意して、日本の親せきに手紙を書き、私の考えと要望を送った。一番頼りとする母は、そのころ既に八十八歳という高齢であったので頼ることはできなかったし、弟妹たちも家庭を持っていて、それぞれに事情があったので、親族による身元引受人の同意は得られなかった。だが私は、そんなことでは諦めなかった。そこで大連会の香山先生にお願いをして、特別身元引受人をお願いしたが、先生は快く願いを聞いて下さって、平成三年七月五日に、日本の厚生省の援護を受けて、国費で日本へ永住帰国ができることとなり、夫婦で日本に向かった。

十 祖国で待っていたのは無国籍

やっとの思いで踏んだ祖国の土、そこで新しい人生が始まったが、まず何よりも先に住宅を確保しなければならず、そのため再び日本語学校の教壇に立ち、非常勤講師となったが、翌年の平成四年に思わぬことが起きた。長男家族を呼び寄せるために入国管理局で手続きをしているときに、私の無国籍が分かり、このままでは家族の来日は許可にならないと言われてびっくりした。ただちに国籍法を調べたら、第十一条に、「日本国民は、自己の志望によって外国の国籍を取得したときは、日本の国籍を失う」と、明記してあった。私は自分の意志で中国籍を取得した時点で、日本の国籍を喪失していたのだった。すぐに区役所で戸籍謄本を取り寄せたが、謄本には私の出生地と生年月日しか記されていないかった。もちろん中国での結婚も、子供たちの存在も記載されていない。直ちに除籍の手続きをして、同時に外国人登録をしたが、登録証の国籍欄は「無国籍」だった。日本国籍に戻すには「帰化」しかないと言われた。中国では、中国籍でも日本人だと差別され、日本に帰れば中国人と結婚し中国籍

となったからもう日本国籍はないと言われ、屈辱に耐えられない怒りが込み上げてきて、涙も出なかった。

戦争が終わって五十数年、私と同じケースで何人も
の残留婦人が、日本国籍を抹消されて無国籍になっている。敗戦後の混乱の中で、生きるか死ぬかの瀬戸際に置かれた少女たちが、やむにやまれぬ人生の選択の結果、中国人と結婚したが、それからの生活において多くの人は、日本人であることを隠さねばならなかった。しかし、それらの人も、どんな境遇にあっても、日本人であることを一度たりとも忘れてはいなかったはず。それが心の支えとなって生きてこられたのだと思う。

二年待って、やっと平成六年三月六日付けで、日本国籍を回復し晴れて日本人に戻ることができ、胸を張って大道を闊歩する気持ちになった。その日は、嬉し涙が止まらなかった。

平成七年の正月には、家族全員十四人が元気でそろい、日本での元旦を迎えることができた。しかし、長年の中国での生活歴による日本の文化への適応の難し

さと戸惑いからいろいろと苦勞はあったが、家族で力を合わせて頑張れば、必ず道は開けるものと確信し、前向きに進むことを家族で誓い合った。

十一 喜びと悲しみの金婚記念

来日した子供、孫たちの就職や就学も順調に進み、何とか落ち着いたので、私たち夫婦は金婚記念ということで、五年ぶりに思い出の地、大連を訪ねた。青春時代を過ごした旧居も、そのまま残っていた。特に私にとっては、大連は生まれ故郷でもあり、心の故郷として特別な愛着を持っており、思い出深い旅であった。だが、帰国して間もなく、糖尿病の夫が脳梗塞で倒れた。以来、入退院を繰り返すようになってしまった。平成九年三月、子供たちから、結婚五十年を祝って博多人形が贈られた。二人の人生の節目に当たって、今日までたどってきた日々を思い返して、感慨無量だった。家族の手厚い看護の甲斐もなく、夫は二年前に亡くなったが、生前家族十四人全員が、無事に来日できたことを非常な喜びとしていて、「お前には、いろいろと苦勞をかけた。本当にありがとう」と、私

の手を握って言っていた。夫の私と家族を思う深い愛情は決して忘れることはできない。また、生前に口癖のように言っていた、「まだ、日本に帰りたくても帰れない、多くの残留孤児のために、私たちでできることをして助けてあげたい」という言葉が、今でも耳に残っている。毎年秋に、肉親捜しで来日する残留孤児のために、私は小さな懸け橋になれば幸いです、ささやかな運動をしている。

十二 心境は葉落帰根

永住帰国を果たして、八年の歳月が夢のように流れてしまった。どうにか落ち着く所にたどり着いたという感じである。「葉落帰根（結局は元に帰る）」という中国の諺があるが、今その意味を身にしみて感じている。

戦前は日本人として生き、戦後は中国人として生きていかなければならなかった私。敗戦や、文革という苦難を乗り越えて、異文化や中国語の学習を身をもって体験した六十五年という歳月に、中国で培われた、おおらかでしんの強い大陸魂が、今でも私の血の中に

脈々と生き続けているが、これは死ぬまでとどまることではないであろう。

七十路を過ぎた私にもまだ夢がある。これからも異文化交流の担い手として、残り少ない人生を、私を必要とする人たちのために、孫との二人三脚で「日中友好の懸け橋となる」ことと、「私の故郷、中国への恩返しをする」ことを願っている。

戦争というものは、人道的な犯罪であり、その戦争が残した中国残留孤児問題は、これまた人道上の悲劇である。

敗戦によって、私たちは中国大陸の凍土に取り残されたが、二十世紀後半の激動の中国で生きのびて、過酷な現実と運命にも、日本人女性の誇りと勇気を失わずに闘ってきた。戦後既に半世紀が過ぎ、戦後の世代が国民の過半数を占めてきた今日、日本国民は、戦争の記憶が風化しているが、その人々のために真実の歴史を語り継いでいくことこそが、私たちに負わされた使命であり、戦争で体験した真実を決して風化させてはならない。そして今も続いているこの悲劇を、二度

と繰り返すことのないように、私は声を大にして叫びたい。

私が中国で暮らしたのは、足掛け六十五年。今は異国になった隣の国ではあるが、これから迎える新しい世紀に向けて、いつまでも人と人が愛し合い、国と国とが平和で結ばれていくことを心底から願っている。

あとがき

私は、人生において、敗戦と文革という二大悲劇を身を持って体験したが、ある意味においては、戦争を知らない現代の人々よりも幸せなのかも知れない。そして、そのことを忘れようと努めても、決して忘れることができないのである。自分が生きてきたことの証として消えることのない心の烙印を残しておきたいと思うばかりである。

米国の詩人、ホイットマンの言葉に、「寒さに震えた者ほど、太陽の暖かさを知る。人生の悩みをくぐった者ほど、生命の尊さを知る」というのがあるが、私の人生の結論のようである。